

穴水町における「ボラ待ち櫓」復興プロジェクト

「県内大学および首都圏大学の学生による地域環境を活かした協働・交流推進事業」

団体名：人間科学部スポーツ学科池田ゼミナール

代表者名：池田幸應

1 はじめに（背景・目的・目標）

全国的に地方の人口減少が進み、奥能登地域においても過疎高齢化によりコミュニティ存続の可否が深刻な課題となっている。穴水町においてもこの状況は同様であり、「穴水町人口ビジョン」及び「穴水町まち・ひと・しごと創生総合戦略」（2015年度に策定）をもとに穴水町総合計画としての地域創生事業が推進されている。

大学の役割として地域への積極的参画が求められており、本学と連携協定を締結している穴水町においても地域資源を活かした交流人口促進による地域活性化策への協働実践が強く望まれている。穴水町と本学との連携については、これまで継続的に行われ、特に人間科学部スポーツ学科池田ゼミナールを中心に野外教育の視点から地域活性化策へのアプローチが継続的に実践されている。

「ボラ待ち櫓」は、穴水町の代表的なシンボルであり、江戸より昭和時代での最盛期には40基を数えたが、その後減少し、2012年には観光用の2基のみの存在となった。その後、2012年10月に本学池田ゼミナールが地元行政・漁業従事者団体等と連携し設置に参画したが、2016年度に荒天により倒壊・喪失したため、連携団体と協働での再築が望まれた。これに対し2017年度、池田ゼミナールと首都圏大学との連携・交流による地域環境を活かした地域活性化策として、「ボラ待ち櫓」の再建を試みた。これには、首都圏大学である高崎経済大学及び地元の石川県立穴水高等学校とも連携協働を図った。高崎経済大学地域政策学部「大宮ゼミナール」は、地域活性化に関する専門性を有する地域づくり学科の学生から構成されており、2013年度総務省域学連携事業『「能登再生フィールド学」構築・実践プロジェクト』としても、同町において池田ゼミナールと連携実績を有している。また、地元高校との連携協働により、高校の地域参画及び地域活性化を促進させ、今後の

穴水町での人材育成・地域振興に期することも期待された。なお、池田ゼミナールは以前から地元行政の穴水町企画調整課や穴水町漁業会「中居七浦七入会」と連携し、ボラ待ち櫓を設置した経歴もあり、今回も連携協働で再建活動を行った。

本稿では、ボラ待ち櫓を再興した2017年度の活動事例（2017年度穴水町補助金事業）を中心に報告する。

2 活動内容

<5月>

◆事前に穴水町の地域資源を活かした地域の取組みについて、学生たちが関連書籍・資料やインターネット等で調べ把握した。

<5～7月>

◆現地視察・打合せ：実際に現地に行き、穴水町の地域環境や資源を視察した。特に既存の「ボラ待ち櫓」についての現状・課題把握、櫓の設置に係る連携団体等との情報交換等を行った。地元の漁業会「中居七浦七入会」代表の松村政輝氏より、「海ごり漁」の体験指導を受け、「ボラ待ち櫓」について直接話を聞くことで地域資源を活かした施策や地域課題等について学んだ。



写真1（左）：既存の「ボラ待ち櫓」を見学する学生たち
写真2（右）：地元「中居七浦七入会」代表との検討会

◆「ボラ待ち櫓」を活かした交流人口促進策の検討、櫓設置準備：連携団体間の役割調整・確認、櫓の材料準備として、新たな「ボラ待ち櫓」の支柱の準備に加え、以前倒壊して保存してあった「ボラ待ち櫓」の材料を活用のため再加工し準備した。また、協働する石川県立穴水高等学校の担当者（高橋教諭）

とも打合せを行った。



写真3 (左) : 以前の「ボラ待ち櫓」材料の海上搬送
写真4 (右) : 以前の「ボラ待ち櫓」材料の再活用

<8~9月>

◆「ボラ待ち櫓」の協働設置 (8月28日~30日、穴水町中居湾)

地元の漁業会「中居七浦七入会」メンバー、石川県立穴水高等学校生徒、高崎経済大学学生、金沢星稜大学学生が協働で「ボラ待ち櫓」を再建した。



写真5 (左) : 「ボラ待ち櫓」支柱を運ぶ高校生・大学生
写真6 (右) : 協働での「ボラ待ち櫓」立ち上げ

<9~1月>

◆「ボラ待ち櫓」を地域シンボルとして活かした交流人口促進策の検討、活動報告書等の検討・作成準備、連携会議の開催

<2~3月>

◆活動報告書の作成、連携会議等での報告



写真7 「いしかわ版里山づくり ISOポスター交流会」
での学生による「ボラ待ち櫓」の情報発信

3 成果、結果の考察

成果としては、まず、実際に「ボラ待ち櫓」を再興・設置できたことが挙げられる。本活動により、係わった学生は勿論、全ての連携団体メンバーの思

い・考えを「連携」という形で実践し、「ボラ待ち櫓」の再建に繋げることができた。地域、大学にとっても以下の成果が挙げられる。

(1) 地域側 : ① 過疎高齢化の若者の人力不足の現状に対し、県内大学及び首都圏大学の協働参画により、地域環境の利点確認、そして地域内外の地域資源の認識強化や情報発信の推進により地域貢献に繋がった。② 県内大学及び首都圏大学学生との直接的な連携活動を通して、大学との親和性を高め、地域-大学の信頼関係を強化し、今後の受入体制の充実、連携活動の継続・深化に繋がった。③ 異なる専門性を有し、県内及び首都圏を拠点とする大学との連携・協働により、地元の穴水高校のふるさと教育の学術的深化や高校生のグローバル化を促進させ、地域の次世代人材としての育成に繋がった。④ メンバーの高齢化が進む中居七浦七入会にとって、複数の学生や地元高校生との交流・協働により、会の活動推進に繋がった。

(2) 大学側 : ① 地域側の連携団体 (住民、行政、地元高校、各団体関係者等) 及び異なる地域・専門性を有する学生と直接的に接することにより、ゼミナール学生の専門性や地域での学びを深化させ、更に奥能登地域 (穴水町) の魅力や各ゼミナールの地域連携の取り組みの周知機会に繋がった。② 特に金沢星稜大学にとっては、連携協定による同町との発展的な継続活動への推進に繋がった。

4 今後の課題、展望

新聞、テレビ、SNS 等での本事業の情報発信により、地域住民はもとより、大学関係者や大学・担当地域連携担当行政からも、地域と大学との優良事例との評価を受けている。ただし、2019年2月現在、設置から約1年5ヵ月間が経過し、ボラ待ち櫓の構造的傾きが生じているため、2019年度に再度、補修活動を連携・協働で行う予定である。